

うと試みるのである。

次に、「科学的—技術的時代」として規定される現代の危機を、ヤスパースの科学技術論に即して明らかにし、それに伴って大衆とニヒリズムの問題とこれらの根底に存する信仰喪失の問題を指摘する。この信仰喪失という危機によって、現在の信仰を導く「未来における信仰」の問題が切実なものとして浮かび上がってくる。

最後に、信仰喪失の危機にある現代において、「未来における信仰」というヴィジョンが哲学的信仰ならびに宗教的信仰に対してどのような訴えかけを持つのかを明らかにする。ヤスパースはこの訴えかけにより、あらゆる信仰が枢軸時代以来の伝統に関わりつつ自らの根源を取り戻し、また科学技術による「地球の統一」を地盤として「人類の統一」へと、すなわち「第二の枢軸時代」へと向かい得る空間を指示しようとしたのである。

以上の諸考察により、「未来における信仰」というヴィジョンが、哲学的信仰や宗教的信仰といったあらゆる信仰に対して何ら確実な答えを与えないものではないにせよ、それらの信仰を未来の問いへと引き込み、「我々の現在の意識」を交わりの中で高めるよう作用し続けるものであることが明らかにされる。ここでは輪郭のみが示されたに過ぎないが、このヴィジョンは『啓示に面しての哲学的信仰』(一九六二年)を頂点とする後期の著作群を手掛かりとすることで、より詳細に論究され得るであろう。

フランツ・ローゼンツヴァイクの思想における祈りの問題

丸山 空大

「祈り」はローゼンツヴァイクにとつて常に重要なテーマであったが、欧米の研究でもこれまでほとんど注目されることは無かった。これは、ローゼンツヴァイクが祈りに重要性を見出しつつも、特に術語として体系的に論じようとしたわけではなかったためであろう。彼にとつて祈りとは神と人間とのコミュニケーションのあり方の一つであり、自身の神理解や人間理解と関係する限りで重要であった。このため、同時代人のハイラーが行ったような包括的で一般的な研究を彼が行うことはなかった。

ローゼンツヴァイク自身が振り返るところによれば、彼は友人の影響で宗教についての相対主義的な見方を捨てて、人間が生における宗教の問題の重要性を認めるようになった。その際、彼はいちどキリスト教に改宗することを決意するが、撤回しユダヤ人として生きる。この改宗劇については、これまでいくつかの背景が指摘されてきたが真相ははっきりしていない。とはいえ、これを機に彼がユダヤ教の伝統と正面から向き合う必要が生じたことは間違いない。キリスト教に改宗する決断をしたということは、一度は彼が知る限りでの当時のユダヤ教に不足を感じていたということである。このため、そこから改めてユダヤ人として生きることを決断したとき、彼は自身の要求に合うユダヤ教を再構成してゆく必要があった。彼の祈りについての関心もここから生じ、このため、当初祈りはユダヤ教全体との関係の中で、とりわけそれが唱えられる儀礼との関係の

中で考察された。

彼はその際、十九世紀ドイツユダヤ教で起こった改革運動、正統主義、シオニズムのどの運動からも距離をとった。彼はまず自らのユダヤ教に関する理念をユダヤ教育の改革という仕方でも主張した。この中で彼は「祈禱書こそ、歴史的ユダヤ教の精髓である」と規定した上で、中等教育においてまず祈禱書の祈禱文を用いてヘブライ語をユダヤ人の生徒に教えることを提案している。つまり、シオニストが主張したようにパレスチナへ移住するのではなく、ドイツという離散の地にあつて、伝承されてきた儀礼や祈禱文の意味を理解しながらユダヤ的な生活を復興していくことを目指したといえよう。

その後に書かれた彼の名著『救済の星』でも儀礼的な祈りの重要性が強調されている。本書では、祈りが有効であるためには正しい時に祈ることが必要であるとされる。ローゼンツヴァイクは内容によって祈りが無効となることは無いとする一方、この適時性という基準を用いることによって個人の困窮から発するとつさの祈りの有効性を強く制限するのだ。これに対し、共同体によって唱えられる儀礼的な祈りは、予め祈りの時と場が定められているため正しい時を失することがなく、内容的にも自由度が高いとされた。

しかしながら、ローゼンツヴァイクのこのような祈り理解はこの後変化してゆく。『救済の星』の二年後に書かれた書簡において一九二五に書かれた論文「新しい思考」においても、異教徒によるとつさの祈りも神に届きうるとされ、さらに、祈りがこの瞬間に叶うようにと願う強い意思こそが祈りに真正さ

を与えるともいわれているのだ。

この変化は、一面では、適時性という基準から倫理的、哲学的に祈りの内容を制限しようとする理論的な傾向の排除であり、また、他面では、共同体の祈りの重視—たとえば同時代のユダヤ教という文脈ではヘルマン・コーエンやユダヤ教儀礼の研究者エルボーゲンもその重要性を強調していた—の撤回である。ローゼンツヴァイクは、啓蒙主義以来のユダヤ教の科学や理論的傾向をユダヤ教をキリスト教の基準で裁いているとして批判してきた。本発表で観察された彼の見解の変化は、その残滓を自らの哲学の中にも見出し、これを自己批判したものとみることができるだろう。

存在と情動——レヴィナスからバタイユへ——

伊原木大祐

バタイユは一九四〇年代末に発表した書評「実存主義から経済の優位へ」の中で、レヴィナスの著作『実存から実存者へ』を取り上げている。本発表ではこの書評を中心に、レヴィナスからバタイユへの思想的連結線をスケッチしてみたい。

『実存から実存者へ』の狙いは、文字通り「実存から実存者へ」の移行を記述することにある。まずは、非人称的で純粹な存在一般(実存)を探求し、ついで、その存在から主体(実存者)が生起する出来事を描き出そうと試みるわけである。とりわけバタイユの関心を引いたのは、前者の「実存」がもつ異様な性格であった。レヴィナスはそれを「ある」と名づける。存在者なき「ある」の中では、内部／外部、主体／客体、自我／